

玉木 平尾さんは、2020年東京五輪の開催前から、オリンピック(以下、五輪)そのものに反対の意志を表明されていましたね。

平尾 はい。最初は17年に連載しているウエブマガジンに開催に反対で、返上するべきだと、はつきり書きました。五輪が商業化して肥大化した結果、スポーツそのものをスポイルしてしまっている。そんな大会は必要ないという意志を示したのです。それは僕一人の意見ではなく、前の年には神戸大学の小笠原博毅先生と成城大学の山本敦久先生による『反東京オリンピック宣言』(航思社)という本も出版されていましたし、東京五輪に反対している人は少なくなかった。

玉木 平尾さんの周囲での、五輪反対論に対する反応は?

平尾 はつきり言って無風状態でした。開催反対なんて言って大丈夫か? と僕の身を案じて心配してくれる人はいました(笑)。けれども、そういった方々は五輪には賛成でも反対でもなく、五輪について触れないようにしていたみたい

たいです。そのことは、とても気持ちが悪かったですね。

玉木 私は、初めは東京五輪招致賛成で、東京五輪をきっかけに日本の軍隊調の「体育」が自主的な「スポーツ」に変われば良いと考えていました。が、森喜朗組織委員会長の女性蔑視発言など、不祥事の続出にウンザリさせられ、日本という国は五輪で金儲けを考えているだけで、開催する資格がない、と結論づけました。

平尾 五輪開催に賛成なら、理由を説明されれば議論を深めることもできたのに、メディアも含めてそういった意見も反応もありません。開催に向かって走ってしまっただけで、そこがなんとも不気味でしたね。

玉木 五輪反対の旗幟を鮮明にした結果、何かマイナスになったこととか、被害はありましたか?

平尾 SNSでの匿名の誹謗中傷は、かなり酷かったです。それは我慢すれば済むことで、精神的には鍛えられました(笑)。大学に電話が来ることもなかったし、仕事への影響もなく、それは逆に残

念でした。きちんと抗議や反論があれば、五輪やスポーツについての議論を深められたはずですからね。

アスリートの「社会的発言」

玉木 元マラソン選手の有森裕子さんや、柔道の山口香さんなど、「物言う元アスリート」も増えてきたように思いますが……。

平尾 そうですね。有森さんが「アスリート・ファーストでなく社会ファーストであるべきだ」と言われたのもその通りだと思うし、山口さんは東京五輪開催前に「オーブンな議論」を呼びかけられた。現役のアスリートも、陸上の新谷仁美選手は「選手だけが(五輪を)やりたいと言うのは我が儘だ」と発言し、水泳の松本弥生選手も「一国民として言うなら(五輪は)今やるべきではない」と公言された。けれど、スポーツ界全体を考えると、一部ですよね。

玉木 確かに。日本のアスリートの「社会的発言」の発信は、まだまだ少ないですね。

平尾 そのことを去年から考え続

けてきましたが、それは結局スポーツ界だけの問題ではないのでしよう。「同調圧力」が強い日本社会全体の問題と言えるかも知れません。公の場で自分の意見を明確に口にする行為が、良しとされない。少数意見は「空気の読めない奴」と見られてしまうでしょう。

玉木 平尾さんは、開催された五輪をどのように見られましたか?

平尾 やっぱりスポーツは好きです。ですからテレビで見ました。それに、多くの人々が開催に反対した大会がどのように行われているのか、きちんと見ておく必要があると思います。

玉木 以前、名古屋屋のテレビ番組に出演したとき、カメラマンの浅井慎平さんが「愛・地球博」(05年日本国際博覧会)に反対する意見を口にされた。その後「愛・地球博」を見に行かれた感想を述べたら「反対していた人間は黙っていろ」というような批判が相次いだといえます。

平尾 それって完全に「村社会の論理」ですよ。反対意見の人間は追い出して「村八分」にする。鴻